

村野次郎創刊

香 蘭



2020年(令和2年)3月号

第97卷

第3号

通卷1071号

二〇二〇年(令和2年)三月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十七卷第三号



香 蘭

2020年(令和2年)3月号
第97巻 第3号 通巻1071号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(55)				
	作品一特選	石井・宮原・城・大井田・西野	武藤昭彦	表二	
	作品二、三特選(一月号)	水本・満木・白井・井上(哲)		2	
	小林(純)・庄司・竹本・田端・馬場・藤本・山本(武)			4	
	作 品			6	
	一			23	
	二			31	
	三			37	
	推薦香蘭集			38	
	香 蘭 集			19	
	歌の生まれる場所(86)			20	
	村野次郎への旅(120)	関	哲	19	
	転載「短歌」1月号コラム「親父の小言」	千々和	久幸	22	
	エッセイ・自由研究 故里を胸に半世紀	香	山	22	
	魚 点(一月号)三句切れではないうた	市	川	44	
	作品一特選欄評(一月号)	千々和	久幸	46	
	作 品 評(一月号)	水	本	48	
	作品一	坪	本	50	
	作品二	山	下	52	
	作品三	小	原	54	
	香蘭集	手塚・山中・後藤・会沢	光	56	
	七 首 抄(一月号)	古川・中島・古澤・小城・近藤(光)	幸	57	
	緑 地 帯	河 野 慎二・千々和	久幸	60	
	明宝研究会第一一四回十二月例会	田	端	72	
	文法あれこれ(10)	坪	倉	74	
	他誌拜見 111			75	
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向			75	
	令和二年度 香蘭短歌会 全国大会のご案内・申込書・詠草記入用紙			82	
	歌会及び会合・会員消息・他			87	
	編集後記・新宿日記			92	
	表紙絵	中村 陽子「重なり合って」	目次・緑地帯カット	和 田 和 雄	表三

武藤 昭彦

村野次郎作品 私の愛誦歌(55)

唐寺の山門高き梅雨ぐもり
からでら

叩く魚板の音しめりたる

『樽風集』

この作品は昭和六年、「長崎にて」の十六首の中で私が最も惹かれる一首である。

十年近く前、初めて長崎歌会にお邪魔した際、初対面にも拘わらず本田民子さん、福田昌己さんが長崎市内を歩いて五時間も案内して下さった。

宿泊ホテルに近い聖福寺を振り出しに長崎奉行所跡（現在、長崎歴史文化博物館）から中島川に架かる眼鏡橋を渡つて興福寺まで来た時、本田さんがふいに「ここで村野先生が一首詠んでいるのよ」と冒頭の魚板の歌を聞かせてくれた。その時聞いた魚板の音は、どんよりした長崎の空へ吸い込まれ、先生の気分を少し味わえた。「長崎にて」によると、その後の先生の足跡が不明である。

そのまま坂を上がって坂本龍馬の亀山社中へ行ったのか丸山の遊里で息抜きしたか先生は沈黙のままである。

（短歌新聞社文庫『樽風集』79頁、『村野次郎三百首 28頁』）

四 選 者 の 作 品

一炊の夢

平塚 千々和 久幸

一炊の夢見る間なく傍らの炊飯器の飯が炊きあがりたる

道化師が真顔で言えり「死を所有せる者のみか死を語るべし」

老人が冬のベンチで煙草吸い立ち去るまでの仕草みている

コーヒ―を飲み気紛れな歌を書くもつとも俗なることをわがして

凡庸な歌詠み人並に酒を飲み名も金も無く 言わんとして止む

鳴かず飛ばずのままに終わらん男らか福袋提げ傍らを過ぐ

病床に妻の鬪う時の間をわれは街に出でスコッチを飲む

床暖を入れ魔法瓶のスイッチを押して飲み直すか 雪まだ止まず

初 春

鎌倉 香山 静子

元日はわが誕生日「おめでたう」と言はれて返事に戸惑ふばかり

晴れ渡る元日の朝を天空より祝福するがの小鳥らの声

お煮染も出来上がりたり口々に「これがなくては」などと言ひ合ふ

三箇日は歩行者天国 振り袖の乙女数人いそいそと行く

元朝を故郷の兄より電話あり「雪でなかなか外出できない」

拭かれたる窓より乙女椿見ゆ蒼いくばく膨らみたるか

お雛子の音に自ずと盛り上がる これから始まる初春の芸

真打の落語聞き終へ（にぎわい座）出づれば巷はすでに夕闇

おろそかならず 我孫子 丸山 三枝子

腰椎の手術決めたる霜月三日 二ヶ月分の歌稿の届く

ひと心地ついたのメール想像を超える手術にいか耐えしか

抜糸終え山茶花梅雨が続きますあとはリハビリを頑張ります

リハビリを頑張りすぎることなけれ模範患者の君にしあれば

（青空がうれしく術後順調）のメールに仰ぐ横濱のおおぞら

師を悼む挽歌が生支えとなり歌の力のおろそかならず

ひるさがり鎧のようなコルセットに巻き締められて歌綴りいん

励まされいるのはわたし 病床のきみの笑顔に見えておれば

洪 柿 東京 桜井 京子

この柿は洪柿なれば鳥も来ず熟れてゆくなりなんにも言はず

容易には落ちぬ花梨よおまへにも都合のあるかまだ三つある

たかだかと皇帝タリアが見おろせるつまらない国になつた日本を

少しだけ改善したる骨密度いいことだつてひとつぐらいいは

前屈みになつて生きてはいけません医師の忠告を比喩として聞く

あつあつの月島もんじやを焼いてをりもんじや愛しや歌会は果てて

鼻先に柚子を浮かべて湯につかる右往左往の一年なりき

われにまだ故里ありて芸備線完全復旧したとふニュース

作品一特選



(五選者共選)

この世の息

習志野 石井雅子

待つてゐる人ゐることのうれしさよ病室なれど毎日通ひし

これまでで一番優しいほほえみを二回投げかけたも眠りぬ

この世の息足りないのだらう息あらく開けてゐた口ふいに止まりぬ

息止めし夫の額に手を置けば数分の内に冷たくなりぬ

骨壺に立派な大腿骨入れなんだカッコツケマンの長い脚なり

子らが去りあなたの写真だけ残り涙の谷にわたしは眠る

青空に黄金の公孫樹は輝いてこの世の何処にもあなたはゐない

百まで生きて

倉敷 宮原迪恵

コスモスのつづく道ありこの村に百まで生きてみたい気がする

あかあかと瀬戸に落ちゆく夕つ日の天動説をわれは肯う

散り敷ける柿の落葉を踏みゆけばかさこそかさ郷里の音す

ドミノ倒しのように季節は駆けてきて木枯し一号今日街に吹く

庭に置く四つの椅子に朝が来てさみしく雨水たまりていたり

仏壇に侘助いちりん供えたり冬のはじめの夫への便り

音たてて封書はポストに吞み込まれこだわりひとつ終わりにしたり

お守り

豊中 城 富貴美

元号の変はりし令和に元年の賀状のなくていきなり二年

志望校めざせる少女へ満開のさくら描かれしお守りを買ふ

つややかな青葉のはざまの寒つばき冬の力のやうなけれなる

空き家の屋根覆ふかの鈴なりに日のあたる柿やまとの朱色

死後はみな捨てらるる物ばかりをば後生大事と簞笥にしまふ

孤独とて快樂ならむ奔放なひと日ひと日がすべてわれの日

使ひよき夫の遺愛のペンシルにメモリし歌を纏める師走

ホームセンター

川崎 大井田 啓子

ホームセンターに向かふ舗道に一本の紅サザンカがあふれ咲きをり

ガーベラを好みし亡母を思ひつつ花の前にてしばし佇む

百歳が目標といふ夫のためヒーター一つ買ふと来てをり

目的のヒーターは措きチューリップの球根二十個選んでをりぬ

入口はどこかと聞けば警備員が花の間の通路を指さす

マイホームはいつか二人になりましたヒーターなどの暖房増やし

ゆつくりと巡る暇もあらばこそ昼餉の準備の時間が迫る

マジックハンド 東京 西野 美智代

灰白き四角の闇の藪ならん術後三日を籠るこの身は
黄櫨はげのきの朱の極まりぬ病床に一葉なりとも送り来よ風

逝く日までわが身支ふるチタンとポルト術後の画像に鮮明なりき
持ち呉れしマジックハンドは君の手に代はりこほれし錠剤拾ふ

十メートルを二本の足で歩けたり腰椎術後十八日経て

豆乳プリンとカード添へられ病床に誕生祝ひの夕膳とどく
よくなりて出でゆく人と再発に戻れるひとが擦れ違ひたり

暖かい冬 倉敷 水本 美恵子

数を増し泳ぐメダカの越冬の準備はいまだ暖かい冬

高齢者支援センターがやつて来た見守りカードの作成せよとて
一羽きてひたきの動く土の上ひたき一羽の世界となりぬ

MRIにかけ写し出す脾臓の診察結果までのわが洞ほら

内視鏡検査を終へて揃へたる電子カルテの待つ消化器科

白菜の結球ほどけてゆくやうに忘れし人の名思ひ出せない
紅の山茶花の花にかすかなる虫の羽音のするなり午後を

夕映え 川越 満木 好美

流木に腰を下ろして眺めおり海のむこうの赤き夕空

海岸に見しあざやかな夕映えはスマホの中に寂しき色す
ひっそりと赤き実つける万両に鳥来て糞を残してゆきぬ

アーバンと名を付けられたいのししが追い回される亥年の師走
見るたびにドキリとすなり近頃の街を行き交う黒いマスクに
越しゆきて初めての冬むかえおり子の住む釧路は零下十二度
夫とわれ分担決めてそれぞれのペースで進む暮れの掃除は

記 憶 川崎 白井 絹子

「先日はどうも」と言われて甦る記憶まだあるまだ老いられず
石路に止まりていたるアサギマダラ越冬先は沖繩という

精一杯ひらきたるのち山茶花ははらりと散りてなにごともなし
幾年を眠りいたりしアルバムを開けば急に賑やかになる

生と死が隣合せのこの日頃模様替えて気を貰いたり

冬越しのえんどう豆にすがりいる精霊蝗虫の五分のたましい
棚上の「お梶かじ」の人形 五十余年を科しなを作りて疲れはせぬか

リハビリ中 福岡 井上 哲子

右下肢完全免荷の札貼れる車椅子がわが足となりたる

はからずも日赤病院六病棟に空のみ眺め米寿迎える
病院の心づくしかお彼岸の小さなお萩がお膳に一つ

息を吐くたびにヒューヒュー虎落笛鳴るよ 持病となりし肺炎

肺炎の治療が優先と身動きがとれないままの魔の十日間

手術ミスとは思いたくなくれども車椅子より離れられざり
リハビリ入院すでに予定の日々過ぎて空き家は雑草伸び放題らし

作品二、三特選



(一月号作品から)

丸山 三枝子 選

〈作品二〉

吾 亦 紅

安来 岩 田 明 美

園児らの引率をする保育士の娘が吾にお辞儀して過ぐ
長年を親しみきたる洋品店の閉店セールに何購はむ

婆たちの憩ひの店にハロウインのかぼちやのお化け南瓜の煮しめ

・一首目の情感、二首目の哀感、三首目のふくよかな皮肉が心地よい。

命はじめ

尾 道 岡 野 甫 江

一对の葉のみづみづしき貝割菜命はじめを敵にひしめく

三食を秋茄子で終え事足ると老いのくらしを爽やかに言ふ

世の中をスマホに覗くこともなく秋の夜長は灯下親しむ

四国には未だ球団無かりしを子規さんならば嘆くぞなもし

・素材の持ち味を活かす表現に拘る。三首目と四首目は機知の味わい。

オリオン

福岡 中村 かよ子

何よりも好きな星座とオリオンを差せば指先初冬に入りぬ

オリオンの空に座りて瞬けば地上に犬が身震いをする

若きより協調性には縁のない夫が協調今説き回る

電車賃もなく歩いて歩いた若き日の貧乏自慢酔い深まれば

・空と地上を結ぶ視点の斬新さ。夫を詠むときの諧謔の面白さ。

月の向こうに

さいたま 松沢 みどり

「うちの子が誕生日」と言う同僚の「うちの子」なるは柴犬のこと
微動だにしない即位の宣言をわれはソファーに寝そべって見る

良い歌が作れませんと月に言う月の向こうに先生笑う

・身辺の事柄への違和感や批判は従来物の、三首目の詠み口は新鮮だ。

団 塊 子

足 科 柳沼 きよ子

自らの意思で生まれた訳で無し団塊老人お荷物ですか

団塊子「金の卵」と搾取され今は老人問題とやら

部屋足りず移動教室強いられてジプシーだった中一時代

何につけ競争率の高かりきついには茶毘の順番までも

・微量の毒が盛られた戦後生まれの団塊世代の感慨、身に覚えがある。

〈作品三〉

空つばの胸

鎌倉 河 野 慎 二

空つばの胸に風立つタンポポの茎の苦さを懐かしむとき

さわがしき街の画廊に入相の鐘が鳴るなりミレーの絵より

ガス・電気・水とまりたる被災地の太古のごとき夜のしづけさ

・一首目は言葉が上滑りしたが二首目は手堅い。三首目の直喩に共感。

一期の夢

横浜 小林純子

起き抜けのジンは甘くて自堕落に人目も柳も外す休日

ただ狂ふ一期の夢に堕ちてなほ青く澄みたり蟬の羽根いろ

二つ名を「夜風お純」と申します得意は波止場の鶴の哭きまね

・我を物語風に仕立てて読ませる。二首目の閑吟集からの下句が上手い。

夏は終りぬ

横浜 庄司健造

紅葉のななかまど背に右端の君の笑顔を写真にのこす

稜線は霧につつまれゆつたりと流れておりぬ夏の梓川

濁流に押し倒されしブタクサは砂にまみれた花を保てり

秋風の流れのままに紋黄蝶八和らぎ橋をこえてゆきたり

・巧みに詠まれた叙景歌。一首一首の言葉のバランスが丁度よい。

神無月

千葉 竹本幸子

疲れ果て気力失せれば飼猫の肉球もみて心をほぐす

ご近所にブルーシートのかかる家すぐまた次の台風来ると

台風に疲れラゲビーに歓喜する悲喜こもごもに揺れるこの秋

子の二人それぞれの地に越して行き令和元年神無月過ぐ

・日常身辺の機微を実感に即した言葉で捉え、銜わずに詠む。

闇にひらく

東京 田端明

夕闇のせまりくるころあの角をまがらば遇はむ白きかほがほ

みなざれば闇にひらくがさだめなりひるがほ科さつまいも属よるがほ

乳液を茎よりすんすん吸ひあげてまひるの蕾はいそがしからむ

純白のよるがほの花ひらくとき夕闇はそと吐息もらさむ

・「よるがほ」の花への心寄せ、四首目の下句の擬人化に注目した。

アサギマダラ 松江 馬場美信

列島を何千キロも翔ぶという浅葱の蝶はまほろば翔り

永遠の放浪なるかおおぞらはアサギマダラを誘うごとく

昨日見たアサギマダラが越えてゆく山の向こうにふるさどがある

あかねさす昼の光を透きてゆくアサギマダラよ我も翔びたし

・アサギマダラの連作、豊かな構想力と大きなスケールで仕上げた。

台風 常陸太田 藤本 佐知子

台風の進路予報が的中したただ今わが家を渦中に入れる

一夜明けテレビは見馴れし町並みの洪水写す 人事ならず

台風は痛められたる桜木に雀ちよつと来て飛び去りゆけり

秋バラが小さく色濃く咲き揃い嵐のあとを甘く匂えり

・台風一過の三、四首目の「雀」と「秋バラ」のあしらいが鮮やかだ。

新米ご飯 福岡 山本 武子

冷蔵庫週に一度の総ざらえ賞味期限を確かめるため

わたくしの賞味期限は何時なのか知らないことは神さまの愛

梅干しと奈良漬け辣菰塩昆布下の段には昨夕のおでん

炊きたての新米ご飯と明太子で幸せになる九十二歳

・わが身にひきつけて詠み、ユーモアのなかに苦みも匂わせている。

「ザムボア」と次郎（十三）

千々和久幸

射し入れり見ゆ

「ザムボア」（朱楽）第四卷第三號は、大正七（1918）年三月一日に発行された。編輯兼発行者 東京市京橋區築地二ノ一 北原章子。定價一部貳拾五銭、發行所 紫烟草舎となつてゐる。表紙の朱楽の實のスケッチは北原白秋、裏絵の鶏のカットはフリツ、ルンブで、これは二月号と変わりは無い。

- ③ 射し入れり見ゆからたちの垣のあたりに啼く犬のこのころにかかり眠られなくに
- ④ ことりことり垣のかなたを行く車ききつついつか眠りおちにけり

時雨の頃

目次を開くと巻頭には白秋の釋評「山家の俚謡」が5頁、次いで河野慎吾の短歌「空ぐるま」七首、村野次郎の短歌「枳殻垣」七首が上、下段に掲載されている。その他は同人の作品、歌壇抄、歌評など全体で54頁。さて前号では作品の無かつた村野先生の「枳殻垣」七首から見えていこう。

- ⑤ 足音をひそめて聞けばこほろぎは畦の暗きに鳴き居るらしも
- ⑥ こほろぎははたと鳴き止み夕しぐれいよよ降りしく重き草葉に
- ⑦ 夕畑のしぐれに寒きわが歩みこほろぎのこゑもうしろになりぬ

① 枳殻の刺にはねつつ降るあられまぢかに奇ればかすかに鳴るも

② 霰やみて根下の白きかなめ垣冬日わづかに

①の歌、いかにも若い鋭敏な感覚が捉えた枳殻に降る霰の情景、という感じを抱かせる歌である。二句の「刺にはねつつ」が、この歌を凡百の叙景歌から突出させている。また

下句も二句に呼応するように、親しみを籠めて詠まれている。

②の歌、「かなめ垣」は「要垣」で、広辞苑には「カナメモチを植えたいけがき」とある。結句の「射し入れり見ゆ」は重複感があつて今日では珍しいが、往時はよく使われた表現で異とするに足りない。①の歌に比べれば平明で穩当な作品、と言えようか。

③の歌、先生に犬の歌は珍しいが、飼犬ではなからう。近隣に飼われていたものか、先生の睡眠を妨げていたとなると、つい余計なことを考えたくなる。

原作は犬の啼き声がかかつて眠れなかつたとなつてゐるが、心にかかることがあつて犬の啼き声になったとも読める。痛み易い若い心にはこんな夜もあつたのだろう。

ついでに「啼く」は手元の『同音同訓異字辞典』（柏書房）によれば、①鳥や獣などが声を出す。②人が涙を流して泣くとあり、犬がなくには「鳴く」が当てられている。

先生には別の意図か思い入れがあつたのだろうが、詮索しないでおく。

④の歌、犬の鳴き声には心を乱された先生も、「ことりことり」という車の音には眠りを

誘われたというのだから面白い。あるいは聞き慣れていた音だったものか。

さてその「車」が実はよくは解らない。大正中期の頃、夜中に「ことりことり」と音を立てて通る車は屋台か、何かの商売を終えて帰る車だったのか、あるいはまれに通る荷馬車だったか。例によってズボラなわたしは、聞かなかつたふりをして通り過ぎよう。

⑤の歌、小題の「時雨の頃」を読むと時雨とおろぎの組合わせが珍しく思えるが、この歌に時雨は詠い込まれていない。詠われているのは蛙に鳴いて居るらしいおろぎである。作者は通りがかりにおろぎの声を聞き留め、足音をひそめて耳を澄ましたというのである。銜いのない、心やさしい歌である。

実はわたしは咄嗟にかつて西條八十が詩を書き、古賀政男の作曲で霧島昇が歌ってヒットした「旅役者の唄」（昭和21年）を思い出していた。余興のつもりでその二番の歌詞を左記しておこう。

時雨ふる夜は 蟋蟀啼いて／なぜか淋しい
／寄せ太鼓 下座の三味さえ／こころに沁みる
／男涙の／牡丹刷毛

こうしてみると時雨と蟋蟀の組合わせは、

存外庶民であったのかも知れない。とは言えわたしはまだ小学生、それでもこんなセンチメンタルな流れ者の歌を聞いて育ったのである。八十がここで蟋蟀を「啼いて」と表記しているのが可笑しい。

まあそんなことはどうでもいい。歌謡曲の感傷はそれくらいにして、次の歌を読もう。

⑥の歌、当然のことながら先生の詠い口はどこまでも真正面からで、足腰のしつかりした手堅い叙景歌である。わたしには二句がやや目立つが、これを一首のアクセントと見る立場もあろうか。

⑦の歌、時雨とおろぎの取合わせで下句に洒落た味わいがある。洒落たと言つて不都合ならば、工夫のある歌と言つておこうか。

わたしはここでも、白秋の『白南風』の中の有名な次の一首を思い出していた。それは・白南風の光葉（てりば）の野薔薇過ぎにけりかはづのこゑも田にしめりつつ

である。⑦の歌の下句からの連想である。洒落た味わいと言つてしまったが、視点の置き所に魅力のある歌であった。

一連の歌を通して感ずることは、いかに当時の歌が自然と密着して歌われていたかとい

うことである。自然はごく身近にあって、歌人の感性はこの自然によつて研がれ、また鍛えられてきたのであろう。自然に抱かれ自然に語りかければ、身辺の俗事より目の位置が高いところに行く。それは生命の根源に触れているからだ。

昨今の短歌が自然を忘れて久しい。わざわざ「自然詠」と断つて詠わねばならぬような有様である。わたしを含めて現代歌人は、人間が生きていることにとつて何か大事なことを置き忘れていたような気がしてならない。

この号の巻末に草舎以外の短歌会への出詠作品が掲載されているので、左に引く。

早稲田短歌会

・くろぐろとすきかへされし畑土に時雨降りしきこほろぎ鳴くも 村野 次郎

一高短歌会

・吾春戸の野田の薄氷さむざむと茜さしつ夕焼申し 北原 白秋

・霜白き橋のかなたの河柳寒きひかり葉をたれてある 村野 次郎

ついでに轉居欄から。

□北原白秋氏は夫人徹恙の爲め今月上旬一家をあげて小田原に轉居され數ヶ月滞在の由。